

エンタメ局ー超クラシックスの第一回

【公開日】:04/6/5 【著者】:OIDUS・DAVID・DEKURON 【記事コード】:0001 【Ver】:初版

【第一回】:野ばらに寄す

太陽の降り注ぐ5月5日、暖かい陽気に誘われ、私は自転車に乗って少しばかりぶらつくことにした。

帽子をかぶり、半そで長ズボン・・・水筒も持った。後は自転車に乗って私の好きな例の場所へ行く。最高だ。

コンビニでまず「ナイススティック」を買う。78円で買えるマーガリンパンなんて今時これくらいだ。レジにいる店員もこの陽気の中、幸せそうな顔をしている。私はその店員の幸福を奪わないようにと、隣のレジで会計を済ました。

少しばかりのストレッチ体操を済ませる。自転車に乗って、まずは快調に走る。途中、タンポポがひょっこりと姿をあらわした。なにかすがすがしい気分だ。小学校の花壇に咲いていたっけ。糸瓜なんて育てたり・・・楽しい時間だった。

サイクリングロードに入り、スピードをあげる。暖かいせいか、ちょっとだけ眠くなっていたところだ。目を覚ますために、時速40キロぐらいのスピードで5キロメートルほど走った。

だんだんと田舎道になってくる。田舎・・・という地域なのではない。むしろ、遠くのほうには国道が何本も通っていて、ビルやらマンションやらを伺うことができる。都会と言うほうが正解だろう。だが、それらを周りに置いて、昔の時間を保っているこのサイクリングコースは、私の一番のお気に入りの場所だ。ひたすら川と一本道が続き、20キロメートルほどの地点で折り返す。これがいつもの「道」だ。

しかし・・・今日は少し勝手が違う。なんせ、五月にここに訪れることはめったにない。夏のような曇のない日に走ることが多かった。今日のような暖かい日は、いつもの倍の距離は走れる気分になってくる。

ああ、太陽よ・・・

・・・くさいせりふはやめておこう。でも、それくらいの上天気なのだ。

高圧線が何本も走っている場所でもあり、それがこの一本道を幾重にも横切っている。なぜか妙なマッチだ。これがなければ田舎道だろうが、それでは「山のある」田舎道になる。ここは「川のある」田舎道なのだ。だからいつでも私の家と繋がっている気分になれる。



両脇の林で、カラスが私を出迎えてくれる。都会の生活圏を離れ、本来の生活をしているカラスほど、実は人なつこいものだ。私は折り返し地点にあった公園で休息を取ることにした。

ベンチからは坂道の一軒家がいくつも見える。なぜか大きな音で「ラジオ体操第2」が聞こえてくるところがほほえましい。つい私も踊りたくなる。

そよ風が騒ぐ、タンポポが唄う。公園の中に・・・高台にあるこの小さな休息所には、やはり小さな野原がある。

野ばらに寄す・・・完(笑)

この曲は、アメリカの生んだ、最初の大作曲家と言われる、「エドゥワルド・マクダウエル」が残した10曲からなるピアノ曲集、「森のスケッチ」の第一曲です。

単一の主題をテーマに、何度も繰り返される美しい旋律が、素朴ながらも晴れやかな情景を、浮かばせます。

こんな曲(?)では無いかも。僕にとってはこう・・・なんですけどネ。

これまた、ヨーロッパ風に言うと・・・

イギリスの白い家で、小さな、白枠の窓がある、家の端っこにある部屋から、窓を開けたまま、これまた白い、まだ腰が着かない揺れ椅子に小さな子供、「マイケル」が座り、外にある小さな林を見つめて、ぶどうジュースをのみ、おやつクッキーを(2時10分くらいに始まるおやつタイム)かじって本を読む、そして、朝、遊んだ時の疲れが出てきて、ふっと眠りについてしまい、一人おきると3時半だった、お母さんは買い物に言っていて、窓から見えるリビングルームは電気が消えており、底に夕方の太陽が降り注いでいる。ペットのジョンが「遊ぼうよ」とほえている。

ああ、もうこんな時間か・・・と、少し眠い目をこすり、ジョンを連れて近所を散歩する。途中、知り合いの「マーガレット」おばさんに出会い、ベーグルを分けてくれて、うれしくなって「おばちゃん、ありがとう！」と言い、おばさんはなぜか「また明日もいらっしやい」と、まるで自分の家に呼んだかのような口調で別れを告げ、マイケルはお気に入りのおもちゃ屋さん「イーグル・トイズ」に入る。

ジョンを連れては入れないから、そばに立っている電柱にジョンをくくりつけ、「まってね、ジョン」といって店のドアに飾られているお気に入りのおもちゃに挨拶をして、前髪の少し薄くなった店の主人「マックス」さんに2セントをもらって、(ガチャポンのような)ルーレットを回し、大好きなキャラクターのフィギアをゲットして、「やった やった！マックス見てよ！大当たりだよ！うわー」と大喜び。

鼻歌を歌いながら家路に着く途中、飼い主の機嫌を察したジョンが楽しそうななきごえをもらし、「やったよ、ジョン！」と、とてもうれしい気持ちになって、4時くらいに家に着くとお母さんはもう帰宅していて、「マイケル、ジョンを散歩に連れて行ってあげた？」と言われ、「うん。それより、ママ見て！これがあつたの！」と、満面の笑みを浮かべ、お母さんに先ほどのフィギアを見せて、「良かったわねえ。きっと神様がマイケルのいいところを見てくれたのよ。」と、息子に人生勉強をし始め、子供はそのとき神様の存在を知り、「いい子」になっていくのです。

なぜかアメリカ生まれの曲なのに、そんなヨーロッパの風景が浮かびます。

もはや、完全な固定観念ですが……

良い曲なのです。僕の一番好きな曲のひとつです。一番はいくつあつたっていいのですよ。同じくらい好きなのですから……

皆さんもぜひこの曲を「1番」好きになってください。

おしまい。

リンク

[OIDUSタウントップ](#)

[超クラシックストップ](#)